

## 20年前アメリカ西海岸で、大越さんといっしょに考えた「フェミニズム」

北原恵

2022年2月下旬、「ちょっと、電話してもいい？」と私。

その直後にかかってきた、藤目さんからの電話。もう何年もお会いしていないけど、声は変わらず懐かしく、あっという間に私は20年前にタイムトリップした。

...

2003年5月27日から31日まで、藤目・大越さんと私の3人で、アメリカ西海岸に行ったことがある。4泊5日のうち、2日は機内だったから、実質3日間。目的は、UCLAの歴史学者、ミリアム・シルバーバーグさんが企画した「Japanese Feminist Speak Out」というイベントで、それぞれレクチャーをするためだった。私は日本のフェミニストのアートを紹介し、二人は日本軍「慰安婦」問題や占領期のRAAのことをしっかりと講演した。

私はこのときまで、大越さんも藤目さんもあまりお付き合いがなく、親しくお話しするのは初めてだった。でも、ロサンゼルスではミリアムの自宅に泊まり込み、ほぼ合宿状態で寝食を共にしたので、さっぱりとした気性の二人とは気が合って、あっという間に親しくなった。毎晩、ミリアムのマンションでお酒を散々飲み、挙句の果てにリビングに敷いてあったミリアム愛用の真っ白な絨毯に、赤ワインのボトルを倒してしまったことは、一生罪の意識から逃れることができないだろう。

UCLAの講演の翌日、私たち3人はミリアムの計らいで、オークランドで開かれたNCRW (National Council for Research Women) という学会にも参加させてもらった。そして大越さんとチョン・ヘンジャさんと私の3人で、「The Neo-militarization of Japan」という発表を行ない、女性国際戦犯法廷のことやフェミニストのアーティストの活動について話す機会もいただいた（このことは忘れていたのだが、発表時に使ったパワポが出てきて思い出した。）。

NCRWでは、アメリカ合州国におけるフェミニズムの現状や限界を目の当たりにして、衝撃を受けつつ、皆で真剣に議論したことをよく覚えている。たとえば、アメリカのフェミニストがイラク戦争に反対すると言っても、その理由には様々なレベルがあることがよくわかった。戦争そのものには反対ではないが、性犯罪など極力なくす方向にすればよいと考えているフェミニストから、アメリカ帝国主義の存在そのものを許さないという立場まで。当然、政府の政策を補完する役割を果たしている前者のフェミニストがマジョリティで、後者はとても少なかった。

また、基調講演を行なった緒方貞子さんが、軍事基地と基地周辺での性犯罪の増加は関係ないと述べたことに対して、会場からのブーイングはもちろんのこと、沖縄から参加していた高里鈴代さんやシンシア・エンローさんがただちに批判したことも聞いた。印象的

だったのは、学会ではやたらと「empire」という言葉が氾濫していて、「悪いempireと犠牲者」という単純な二項対立に構造化されてしまっていたこと。アメリカ帝国主義を名指ししない。つまり、自国や自分たち自身への批判的視点が、決定的に欠如しているのである。ミリアムは、このような大国アメリカのフェミニズムの現状をしっかりと見てこい、という意味を込めて、私たち3人をオークランドに送ってくれたのだった。

翻って、今の日本と世界の状況はどうか。プーチン政権によるロシアのウクライナ侵攻が、先週（2月24日）に始まり、経済制裁だけでなく、日本の核武装だの、自衛隊経験者のウクライナへの志願だの、やたらとマッチョな英雄主義を煽る言説がメディアに溢れている。一方、フェミニストたちの反戦・非戦の声はまだまだ弱いように思う。大越さんなら、きっと何か発言したはずだ。20年前、大越さんと一緒に西海岸で、一緒に食べ、眠り、笑い、考えたことを、私はこれからも忘れない。

## アジア現代女性史研究会結成前後の思い出の写真 米国旅行



（左）UCLA 女性学センターの前でミリアム・シルバーバーグの学生たちと記念写真。  
左から竹内美智子さん、北原恵さん、グレゴリー・ヴァンダービルトさん、大越愛子さん



UCLA、2003年5月30日。左から北原恵さん、鄭幸子さん、大越愛子さん